

7月22日の開館からわずか3カ月で入館者が年間目標の1万5000人を突破した合志マンガミュージアム(合志市御代志)。漫画を読むことができるメインホールは「キューブ」と呼ばれる木の柱を方形に組み合わせた調度品と、縁側のような本棚がまるで漫画から飛び出してきたかのように見え、入館者は調度品に座ったり寝そべったりして作品の世界に思い思いに没る。設計者の崇城大学准教授、西郷正浩さん(50)に狙いを聞いた。

【杉山恵一】



合志マンガミュージアムの設計者

西郷 正浩さん(50)

さいごう・まさひろ 1967年生まれ、大阪府高石市出身。86年熊本大学工学部入学、93年同大学院工学研究科修了。96年から崇城大学工学部助手、2000年から同講師、13年から准教授。芸術家や自治体職員らさまざまな職種の人と活動を共にして形づくる建築の実践と教育への反映がテーマ。JR上熊本駅舎を活かしたまちづくりの会理事・企画委員も務める。来年3月、西合志図書館と合志マンガミュージアムの間に完成する「カフェ」のデザインも担当する。

井に近づけるよう本棚の背を高くしました。ところが本棚が高いと地震が来たら本が落下して危険です。それでメインホールの壁に接する本棚は、縁側部分の上に天井を設けて落下から入館者を守るようにしています。

Q 合志マンガミュージアムは所蔵する約7万冊の漫画だけでなく、館内の意匠が好評 一人一人のスペースが

Q 木材のキューブ 仰る場所としてだけではない。合志マンガミュージアム周辺の道筋に数多く残る小さなお堂は、信

Q 設計に熊本地震も影響しましたか。 西郷さん 京都市の京都国際マンガミュージアムのメインギャラリーには、漫画5万冊が高さ2・3畳の天井まで本棚に並んでいます。それをイメージしました。合志のメインホールは収蔵1万3000冊と京都に比べると少ない。それでも本がたくさんあるように見せるため3・5畳の天井に近づけるよう本棚

公共空間への問題提起

確保され便利ですが、ありふれているものが多い。合志マンガミュージアムのメインホールは入館者が何も考えず、隣の人も気にせず、どこで読んでもいいようにと考えました。それぞれが心地よいと思う場所のできな姿勢で、側面に人が集うお堂の形が特に好評です。西郷さん 昨年、大い、交流する場です。合志のお堂に倣ってキューブの一方は約2畳。これは昔、神社や寺院が使った京間という寸法で1・97畳です。Q 560平方メートルの強度を保てました。Q 館内の照明は少し暗い。西郷さん ファミリーレストランのような分かりやすくて明るい空間は作りたくなかった。今ある多くの公共空間への問題提起でもあります。それに私は関西の集合住宅で育ち、自宅の階段下で漫画を読んでいました。昭和の経済成長期は漫画は「悪書」で、みんな家で隠れて読んでいたという記憶を呼び起こしたかった。幸い暗いという声はなく、リーダーも5000人を超えて私の狙いを理解いただけたと感謝しています。